5707

歴代ヒット曲のコード進行の特性について

Analysis on a chord progression of a old hit songs

CS47　矢竹亮介
指導教員　米山秋文

1. はじめに

本研究の目的は歴代ヒット曲のコード進行を探り今後どのようなコードを使用した楽曲の売り上げが良くなるのかを予想することである.

1985 年から 2000 年までの期間にはミリオンを突破する楽曲がとても多く, 数多くのアーティストが活躍をしたが, 最近の楽曲はどれもミリオンには到達しない楽曲が多く, 売り上げ不振が続いている.

売れる楽曲と売れない楽曲の違いを考えた時に, 各アーティストの楽曲の方向性や趣向, 楽曲の違法ダウンロードなどいくつかの理由が考えられるが, 私は楽曲のコード進行の関係が大きいのではないかと考えた.

そこで, 楽曲のコード進行の特性に重点を置き, コード進行の特徴から最も売り上げが良くなると思われる効果的なコード進行について考察を行うことにした.

2. 研究内容

ド, ファ, ソを主音とする和音がもっとも重要で使用頻度が高い3つのコード, トニックコード, サブドミナントコード, ドミナントコードの使用率を調査し, 最も売り上げが良くなるコード進行を予想する.

3. 結果

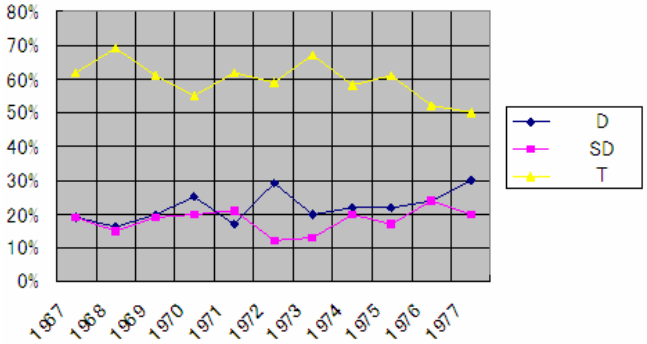

図 1. 1967 年～1977 年の 3 コードの使用率

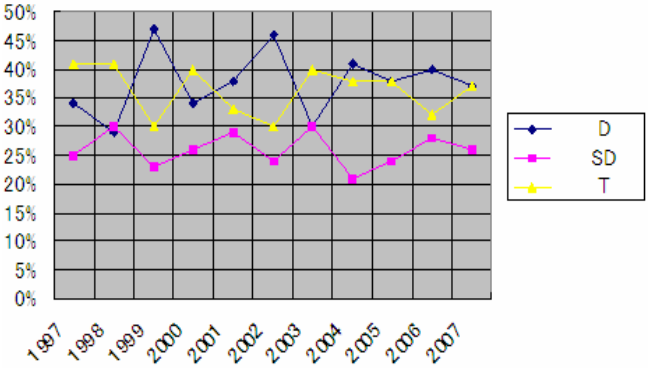

図 2. 1997 年～2007 年の 3 コードの使用率

図 1 及び図 2 から分かるようにトニックコードの使用率は1970 年代と2000 年代では明確に差が表れた.

近代においてはトニックコードの使用率が減少し, 全体のドミナントおよびサブドミナントコードの使用量が増加していることが分かった.

曲の基本の和音であるトニックコードを使用すれば曲の展開が単純になってしまう場合が多く, そういった事態を回避する手段として日本の音楽業界全体の傾向として, コード進行を複雑化させるという方法を採る場合が多いことが分かった. 結果的に, この傾向が進むのであればトニックコードの使用率はますます減っていく事になる.

4. 考察

様々な音楽が氾濫している現在, 単純な作曲, 編曲だけでは他の楽曲との明確な差別化を図ることが出来なくなってきている.

まだ日本人が歌謡曲というものに対して無知だった頃は, 他の曲と統一されたような変化の乏しい編曲でもそれなりの売り上げを出すことが出来た. しかし, 現在の音楽業界の消費者である若者は単純な作曲, 編曲では満足する事は出来ない. これは現在の演歌業界の衰退からも容易に量ることが出来る. 多様化する音楽需要に追随していくために, コード進行も時代とともにトニックコード一辺倒ではなく多様化しなければならないと考えられる.

5. 今後の課題

今回の研究ではトニックコードの使用率には明確な差が出たが, ドミナント及びサブドミナントコードの使用率にはトニックコードのような大きな変化が見られなかった.

この理由としては最近の楽曲ではドミナントコード, サブドミナントコードの代わりに曲の中で同じ効果を持つ代理和音というコードを多く使用しているためである.今後この代理和音のコード進行の使用率を求めれば, より正確なコードの使用率が求められるのではないかと思われる.

文　献

[1]クラブハウス著「ORICON NO. 1 HITS500上
クラブハウス 1998 年 11 月 1 日発行
[2]クラブハウス著「ORICON NO. 1 HITS500下
クラブハウス 1998 年 11 月 1 日発行